目次

凡例……vii

一　文献アクセント史研究の要点……1
一　文献アクセント史の記述と解釈……1
二　史的変化と規則性……3
三　類別語彙表とアクセント変化……5
四　下降拍の認定……8
五　動詞アクセント体系とアクセント変化……11

二　開合名目抄と名目開合抄……17
一　はじめに――開合名目抄の版本と写本――……17
二　新義真言宗の論議書としての開合名目抄……18
三　版本と写本の比較――全体構成と本文――……22
四　版本と写本の比較――項目の配列――……25
五　版本と写本の比較――声点と節博士――……28
六　漢語アクセントにかかわる記述……30

七　おわりに……32
三　補忘記の貞享版と元禄版……39
一　はじめに……39
二　貞享版の版種……40
三　貞享版と元禄版における項目の比較……43
四　漢語の声点および節博士に異同のある項目……50
五　漢語の節博士にのみ異同のある項目……59
六　おわりに……62
四　補忘記に載る漢語句の音調……67
一　はじめに……67
二　補忘記の資料的性格……68
三　出合についての條目……70
四　漢語句の音調についての條目……73
五　漢字四字から成る漢語句の音調……75
六　声点のあらわす音調が低平調の漢語……79
七　おわりに……83
五　論議書に見える「出合」の資料性……91
一　はじめに――補忘記に反映するアクセント……91

二　出合の問題点……94
三　桜井説と金井説について……97
四　私説――師伝による平らな音調……101
六　平曲のことばと日本語史（講演録）……107
一　はじめに……107
二　ことばの清濁を知るてがかりに……108
三　発音注記からわかること……111
四　譜記から推定されるアクセント……118
五　おわりに――『平家正節』からわかること……120
七　譜本としての『平家正節』――〈日本語アクセント史〉からの提言――（シンポジウム記録）……127
一　はじめに……127
二　『平家正節』の詞章と譜記について……129
三　『平家正節』の詞章の句切り方について――無譜部分についての一解釈――……132
四　平曲の低起性旋律について……135
五　おわりに……138
八　『平家正節』にみえる漢語サ変動詞のアクセント……141
一　はじめに……141
二　江戸期の京都における一字漢語のアクセントと声調との関係……141

三　連体形四拍の漢語サ変動詞のアクセント……142
四　連体形三拍の漢語サ変動詞のアクセント……153
五　その他の漢語サ変動詞のアクセント……157
六　先行研究と本稿のまとめ……160

九　平曲譜による助動詞の独立性の検証……167

一　はじめに……167
二　古代語における助動詞アクセントの研究……168
三　近代語における助動詞アクセントの研究……173
四　指定辞ナリ・タリのアクセント……175
五　完了辞タリと過去回想辞ケリのアクセント……177
六　完了辞ヌ・ツのアクセント……180
七　おわりに……184

十　契沖の仮名遣書と定家仮名遣……189

一　はじめに……189
二　『和字正濫鈔』の記述について……190
三　『和字正濫通妨抄』の記述について……194
四　『和字正濫要略』の記述について……200
五　仮名遣書にみる〈音の軽重〉……202

六　おわりに……206
十一　文雄のアクセント表記……213
一　はじめに――「四声単位」としての「仮名合字」――……213
二　「合字四声」……215
三　複合語の音調のあらわし方……216
四　○●●・○○●と○●○のあらわし方……220
五　文雄の「平声」について……221
六　おわりに――研究史における本稿の位置――……223
十二　本居宣長の四声認識……229
一　はじめに――宣長の四声についての記述――……229
二　文雄の四声認識……231
三　契沖・宣長の四声認識……237
四　契沖・宣長の四声認識と文雄の四声認識……239
五　音調認識の確認……242
六　近世における四声認識の由来と継承……244
十三　近世四声論拾遺……251
一　伊勢貞丈の四声認識……251
二　石原正明の四声認識……254

三　言語国訛にみえる四声認識……256
四　能楽伝書にみえる四声認識……259
五　まとめ……261
参考文献……265
後　記……275
索　引……001㊦

凡　例

一　本書は主として中世後期（室町期）以降の文献資料にもとづいてアクセント史を論じた拙稿をまとめたものである。

二　日本語の音調、アクセントをあらわす場合、高拍を●、低拍を○、下降拍を◐、上昇拍を◑と表示することを原則とする。ただし、ときに傍線によって高拍をあらわす方式も併用したところがある。

三　声点は、その位置によって文字の左下に差されたものを「平（ひょう）」、同じく左上に差されたものを「上（じょう）」、右上に差されたものを「去（きょ）」、右下に差されたものを「入（にゅう）」とし、声点のないところは○印をもってあらわす。横並びの双点は「平濁」「上濁」などとしるし、縦並びのものはそれぞれ「新濁」とする。また声点は〈　〉に括って示すことを原則とする。ときに拍数や清濁を捨象してあらわす場合には《　》を用いることがある。

四　論議書の節博士は多く文字の左側に付されるが、左上がり線条譜を「徴（ち）」（高拍をあらわす）、平らな線条譜を「角（かく）」（低拍をあらわす）とする。「徴角」「角徴」の複合譜は［　］で括り、節博士のないところは○印をもってあらわす。また節博士は声点と同じく〈　〉に括って示す。声点とともに記されている場合は、／の上に声点を、下に節博士をしるす。

五　平曲譜は多く文字の右側に付され、「上」「コ（コ上）」の文字譜をそのまま用いてあらわす。また平曲譜が文字譜の場合は（　）に、線条譜などの場合は適宜「上」「平」「下」などの文字にあらため《　》に括って示す。いずれも無譜の箇所は×印をしるす。各種平曲譜本の略号や準拠本については、凡例第七項にしるす。

六　語学書、謡曲伝書、平曲伝書などに記された線条譜については、そのまま《　》内にしるしたところがある。

七　とくに左の資料については、それぞれ準拠した文献と検索に用いた文献を掲げる。これ以外の資料については、それぞれ本文中に明記した。また「　」内は本書で用いた略称である。

声点資料

「観本名義」『類聚名義抄』観智院本

新天理図書館善本叢書『類聚名義抄　観智院本』一～三（八木書店二〇一八）

正宗敦夫 編『類聚名義抄』全二冊（風間書房　一九五四・一九五五）

「色葉」　『色葉字類抄』三巻本

前田育徳会 編『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』（勉誠社　一九八四）

中田祝夫 峰岸明 編『色葉字類抄　研究並びに総合索引』（風間書房　一九七八）

平曲譜本

正節系譜本

「東」　東大本（東京大学文学部国語研究室蔵、全41冊 13-119B）金田一春彦編『青洲文庫本平家正節』三省堂　一九九八

「尾」　尾崎本（尾崎正忠氏蔵、全39冊）平家正節刊行会編『平家正節』上・下　大学堂書店　一九七四

「早」　早大本（早稲田大学演劇博物館蔵『平家物語 節附本』全20冊 ト27-12）※岡正武浄書本

「京」　京大本（京都大学国文学研究室蔵『平曲正節』全18冊 國文学Kh3）京都大学文学部国語学国文学研究室編『平曲正節』一～三　臨川書店　一九七一 ※岡正武校合本　このうちA（126章段）は正節系、B（39章段）は「江戸初期伝播本式正節」、CD（29章段）は「吟譜に江戸初期伝播本式正節を書き込んだもの」という（薦田治子二〇〇三、二〇一頁）。したがって『正節』系譜本といえるのはAの章段のみである。

「芸」　芸大本（東京芸術大学附属図書館蔵『平家正節鈔』全6冊 W768.3-H11）※雪月花（各上下2冊）に全68曲を収める。津軽系の正節抄出本。

前田流古譜本

「筑」　筑波大本（筑波大学附属図書館蔵『平家物語節附本片仮名本』全12冊　ル140-12）※巻一の十二章段のみ。

「北」　東北大本（東北大学附属図書館蔵『平家物語かたり本』全191冊　768-8-1～5）

「也」　也有本（横井家蔵『平語』全15冊）渥美かをる解説『横井也有自筆　平語』角川書店　一九七七

吟譜系譜本（江戸前田流）

「宮」　宮崎本（宮崎文庫記念館蔵、全12冊）村上光徳・鈴木孝庸編『平家吟譜―宮崎文庫記念館蔵 平家物語―』瑞木書房　二〇〇七

「高」　高田本（上越市立高田図書館修道館文庫蔵、全2冊　40-75-2）鈴木孝庸（一九九五）「『琵琶平家物語』上（上越市立高田図書館蔵）」『新潟大学人文科学研究』八七　※上巻には「禿」「我身栄華」など巻一・巻二から九章段、下巻には灌頂巻五章段を収める。

「米」　米沢本（米沢市立図書館蔵、全1冊、木村198）村上光徳（一九六九）「資料紹介　市立米沢図書館蔵『平志吟譜』木村本」『駒沢国文』七　※「忠度都落」「青山」など十章段を収める。

豊川系譜本（江戸前田流）

「豊」　豊川（勾当）本（早稲田大学演劇博物館蔵『平家物語』全24冊 ト27-13-1～24）　秋永一枝・梶原正昭編『前田流譜本 平家物語』一～四　早稲田大学蔵資料影印叢書3～6　早稲田大学出版部　一九八四・八五　※右朱譜は原譜、左墨譜は線条式に改訂した正節譜

波多野流譜本

「秦」　秦音曲鈔（山口県立山口図書館蔵『秦音曲鈔』全24冊、享保十四年跋）奥村三雄『波多野流平曲譜本の研究 付 秦音曲鈔影印本』勉誠社　一九八六

「波」　波多野流譜本（京都大学文学部蔵『節付ケ語リ本平家物語』全24冊 國文学Kh2）渥美かをる解説『平家物語　節付語り本』一～六（古典資料類従8～13）勉誠社　一九七七～七八

一　文献アクセント史研究の要点

一　文献アクセント史の記述と解釈

日本語のアクセントは、声の高さの相対的な関係によるものである。それは、主として単語あるいは文節について、それぞれの社会の慣習としてほぼ一定している。そして、このような声の高さによるアクセントは、過去の時代にも存在したと考えられ、少なくともその連続性を前提として、アクセント史は記述され、解釈されてきた。しかし、その記述や解釈を支えるアクセント観は研究者によっていろいろに異なる。

ふつう通時的観点からアクセントを記述する際には、一つひとつの拍が高平・低平・下降・上昇という音調をもち、そのような音調をもったいくつかの拍が（制約はあるにしても）語や文節を形成して一定の音調型をなしていると考える。そしてその、語や文節ごとに定まっている音調型をアクセント（またはアクセント型）と呼ぶ。文献アクセント史の主な対象となる京都アクセントの場合には、それぞれの拍数に応じていくつかの定まった型がある。たとえば、鎌倉時代の京都アクセントにおいては、二拍の名詞には五種類の型が、三拍の名詞には七種類の型があった、などというように。

ここに「拍」というのは、リズム（音数律）の単位となるものである。日本語の場合には、たとえば俳句や短歌で韻律を数えると五七五または五七五七七となるが、そこに数えられる一つひとつの単位を拍という。[1] このような拍が